咸臨丸太平洋横断航海150周年を迎えて① 開国と幕府使節団派遣前夜

文・写真：河辺雄二、CFAY広報課

咸臨丸とは

咸臨丸が日本の軍艦として初めて太平洋横断航海に成功して150周年を迎えた。咸臨丸は江戸幕府がオランダに建造発注した二隻の蒸気コルベット艦のうちの一隻で（もう一隻は朝陽丸）、海軍士官養成のために幕府が設立した「長崎海軍伝習所」の練習艦として安政四年（1857）に就役した。幕府使節団のアメリカ合衆国派遣に際し幕府正使らを乗せた米軍艦ポウハタン号の随伴艦として、咸臨丸は安政七年一月十九日（西暦1860年2月10日：安政は旧暦3月18日に万延に改元）太平洋の大海原に向け浦賀を出航した。太平洋横断航海150周年にあたり、咸臨丸から幕末という激動の時代とその背景を探ってみたい。

北海道木古内町サラキ岬に復元された咸臨丸。サラキ岬沖は咸臨丸終焉の地

すり替えられた主役

咸臨丸が勝海舟や福沢諭吉を乗せ太平洋を渡ったことは周知のことであるが、幕府から正式に派遣された遣米使節団のことはほとんど知られていない。使節団はホワイトハウスでブキャナン大統領に謁見し、ブロードウェイをパレードするなどアメリカ各地で大歓迎を受けている。なかでも小栗豊後守忠順（のちの上野介）の活躍は「ザ・フィラデルフィア・インクワイヤラー」や「ニューヨーク・ヘラルド」などの新聞にも、『オグロ・ブンゴ・ノカミはシャープで、使節団の中心人物』などと特筆され、ワシントンでは当時人気と尊敬を集めていたブラック判事になぞらい、『日本使節のブラック判事』と呼ばれたことを紹介している。

日本の特使としてサンフランシスコからパナマ経由でワシントン、ボルチモア、フィラデルフィア、ニューヨークを訪れ、日本人として初めて世界一周を果たして帰国した主役である遣米使節団のことを、何パーセントの日本人が知ってるであろうか。なぜサンフランシスコを往復しただけの咸臨丸の方が教科書に載っているのか。

明治以降現在に至るまで、幕末に開国や近代化に手腕を振るった幕臣たちの事績は消し去られ、戊辰戦争のどさくさに新政府軍によって謀殺された小栗については、ほとんど語られることもなかった。

幕府遣米使節団が乗艦した米軍艦ポウハタン号。ペリー提督が二度目の来日時(1854年)に乗艦していた旗艦であり、日米修好通商条約締結（1858年）の調印もこの艦上でなされた。ポウハタンとはアメリカ先住民の部族名で、当時の米海軍艦船は先住民にちなんだ命名が多く見られる。

＊こうした歴史の歪みを正すべく、小栗上野介顕彰会では「咸臨丸150周年」ではなく、明治以来の教科書から隠されてきた本当の主役たちによる「遣米使節訪米150周年」であるべきと歴史教科書の是正を提唱している。また小栗関係の資料としては、顕彰会理事の上野介菩提寺住職村上泰賢氏編著「小栗忠順のすべて」などの関連書に詳しい。

先日の新聞記事に遣米使節団150年を記念したパレードがニューヨークで行われたことが載っていた。それによると「遣米使節団は、江戸を出発した後、途中まで勝海舟や福沢諭吉を乗せた咸臨丸の護衛を受けながら、・・・（後略）」（7日付夕刊）という記事であったが、海上護衛はあくまで派遣の名目であり、実際サンフランシスコまでポウハタン号の遣米使節団とは航路も日程も違い、海上で一緒になることはなく、護衛などありえなかったことが知られている。いまだ咸臨丸神話に引きずられた内容で、大マスコミのデスクのレベルがこれでは若い世代にもなかなか歴史の真実は見えてこないだろうと思うと、暗澹たる気持ちになる。

日米修好通商条約批准書の交換

幕府による使節団のアメリカ派遣のいきさつは、二年前の日米修好通商条約締結に遡る。全権大使によって取り交わされた条約は、締結後に国の承認を得た批准書を交換して発効する。前回1854年にペリー提督と林大学頭復斎らによって調印された日米和親条約の時は、アダムス中佐がワシントンに条約を持ち帰り、米議会での承認を得てピアス大統領の署名が入った批准書を持って下田に戻り、幕府老中六名の署名入りの批准書と交換した。今回老中首座堀田正睦（まさよし）と駐日総領事ハリスの間で取り交わされた修好通商条約は、アメリカ合衆国が幕府使節団を招待する形で、米国での批准書の交換が取り決められていた。幕府は米軍艦ポウハタン号に乗艦する遣米使節団に万一があったときに備え、その代役として軍艦奉行木村摂津守喜毅を司令官として咸臨丸に乗艦させ、長崎海軍伝習所で航海術を学んだ日本人らの操舵訓練を兼ねてサンフランシスコまで派遣することを決定したのであった。

幕府老中首座・堀田備中守正睦（佐倉藩主）。

＊この条約は現在でも教科書で「幕府が結ばされた不平等条約」と紹介されているが、攘夷派の幕閣や公家らの大反対に遭って困難を極める中、世界情勢を把握した当時の日本ではトップクラスの知識を持った人たち、老中首座の堀田正睦とその部下らの必死の尽力で締結されたものである。強権を振るった大老井伊直弼によって堀田が罷免された後も、堀田の腹心たちによって他の列強四カ国（蘭・露・英・仏）と修好通商条約を矢継ぎ早に結び、列強たちが牽制しあう状況を作って日本への侵略を防いだ。当時の日本では画期的な条約であり、これ以上の条件で締結することは誰にも不可能であったことは明らかで、悪評は明治政府首脳らのプロパガンダに過ぎない。

遣米使節団の決定

安政五年に新設された外国奉行は、列強をはじめとする世界中の国を相手としなければならず、当時の幕府の中でも特に俊英を極めた人材が集められた。日米修好通商条約交渉を直接担当した井上清直と岩瀬忠震（ただなり）をはじめ、水野忠徳、永井尚志（なおゆき）、堀利熙（としひろ）といった面々で、老中の堀田は批准書交換という大役を務めるのは、この中から抜擢するつもりであった。しかし将軍継嗣問題で多くの有能な幕臣が井伊大老によって罷免され、外国奉行の中ではただ一人残っていた水野も直前に起きた横浜でのロシア海軍兵士殺害事件の責任をとって左遷中であった。

幕府大老・井伊掃部守直弼（彦根藩主）。

結局安政七年にアメリカに派遣されたのは正使に新見（しんみ）豊前守正興、副使に村垣淡路守範正といった温厚だが凡庸な外国奉行たちであったが、井伊大老から監察役に指名された小栗忠順は年齢的に若かったゆえに将軍継嗣問題にも関わっておらず、その頭脳明晰で鋭い切れ味を買われての大抜擢であった。

＊将軍継嗣問題とは、心身に障碍を持ち、煮豆や蒸かしいもを作って家臣に食べさせることを楽しみとしていた十三代将軍家定（御台所はご存知天璋院篤姫）に跡継ぎがまったく期待できないことから、多くの幕臣は一橋慶喜を次期将軍にと期待をかけていた。しかし大老井伊直弼は慶喜の資質を見抜いていたかどうかは疑問だが、慶喜の実父が反目する老中徳川斉昭であることから、自らは十三歳の和歌山藩主慶福（よしとみ・のちの十四代将軍家茂）を推し、南紀派と一橋派が争う中、慶喜を推した一橋派を次々と粛清していった。継嗣問題は強引かつ強烈な個性を持った直弼と頑迷で保守的な斉昭の争いでもあった。

国際感覚を持った幕臣と攘夷を唱えた人々

ペリー艦隊来航時に開国を建白した幕臣の筒井肥前守政憲と川路聖謨（としあきら）は、その後ロシアとの日露和親条約締結交渉で応接した際、激しいやり取りをしながらも、その機知と炯眼によって彼らに感動を与えた。ロシア使節プチャーチン中将は「筒井と川路の丁寧な態度と心遣いは、教養あるヨーロッパ人となんら変わるところがない。川路の機敏で偏りのない知性と巧みな議論を以ってすれば、ヨーロッパ社会に於いても傑出した人物となろう」と絶賛している。二人の誠実さに信頼を寄せたプチャーチンは七十七歳の筒井を父と仰ぎ敬い、いたるところで気遣いをみせた。またロシア人はウイットに富む川路を肖像画に描こうとするが、「私のような醜男を日本人の代表に思われては困る」と言って皆を笑わせた。

ロシア応接係として交渉に当たった川路聖謨。ロシア人たちは川路の知性と人柄に魅了され、プチャーチン中将やゴンチャロフらはその著書の中で絶賛している。

筒井と川路は樺太で国境が接する大国ロシアとの交渉は最重要と考え、国境画定の下準備を含めた建議書を幕府に提出するが、ことごとく徳川斉昭に反対されて、中途半端な難しい交渉を強いられることになる。しかし二人の粘り強い交渉に加え、その知性と人柄が和親条約締結を成功させたといえる。

初代外国奉行のひとり水野忠徳は「日米通商による交易はすぐれた面があり、良策であるが、自給自足で成り立っている日本が急いで無条件で開国すれば、民衆の生活や経済が脅かされるおそれが高い」と開国を進めながらも、無条件での急激な開国通商には警戒感を示していた。幕府の中にはこうした国際感覚を持ち、現実を見据えて日本の将来を考えていた優秀な人材がいた。また近代化を進めて西洋と同等にならなければ列強から国を守るのは難しいと自藩の技術革新に力を入れた薩摩藩主・島津斉彬（なりあきら・篤姫の養父）や佐賀藩主・鍋島直正らも聡明でバランス感覚を持ち、斉彬は外国を排斥せよという攘夷論を「無謀の大和魂の議論」と切り捨てていた。

一方、時代に逆行するかのごとく外国人はすべて排斥すべきとする攘夷を唱えた幕府老中の水戸藩主徳川斉昭や外国人が日本に入ることによって自分たちの権威が犯されることを恐れて開国や修好通商に大反対を唱えた岩倉具視ら京都の公家たちとのコントラストは鮮明である。

幕府老中・徳川権中納言斉昭（水戸藩主）。

幕府による開国後も攘夷一辺倒であった長州藩や斉彬の死後攘夷が強まった薩摩藩などがその愚かさを悟るのは、外国と戦って手ひどい目に合う数年後のことであり、開明派の幕臣らと比べると大分遅れをとっていたことが分かる。（続く）